

## 神話、文学、歴史におけるアマゾン

—古代ギリシアからルネサンス期イタリア、  
イングランドまで—

小田原 謠子

アマゾーンの女王との一騎打ちに破れ、囚われの身となった未来の夫を助け出すべく、男装の（女）騎士がアマゾーンの国へ乗り込み、激しい戦いの末に彼を救い出すというエピソードが、エリザベス朝の長詩、エドモンド・スペンサーの『妖精の女王』第五巻の半ばあたりにある。これは、この二人の間柄を端的に表わす出来事なのだが、ここに登場するアマゾンとは、いったい何者か、どのような存在であるのか。スペンサーのアマゾンが登場するまでに、どのようなアマゾン像が存在するのか、換言すれば、どのような経緯をたどってスペンサーのアマゾンに至るのか。古来、神話や文学作品に言及されている好戦的な女人国、アマゾンのエピソードをたどり、スペンサーのアマゾンの背後にある神話以来のアマゾン像を明らかにしたい。

### 神話世界のアマゾン

アマゾーンの女王として、ヒッポリュテーとペンテシレイアが名高い。紀元前2世紀、ギリシアのアポドーロスが集大成した『ギ

リシア神話』には、ヘーラクレースとの関わりでアマゾーンのことが語られている。ヘーラクレースがエウリュステウスに命じられた9番目の功業は、アマゾーンの女王ヒッポリュテーの帯を持つてくることであった。彼女はテルモドン河畔に居を構え、アマゾンたちを支配していた。彼女たちは武を練り、交合によって子を生むことがあれば、女の子は養育、右の乳房は槍を投げる邪魔にならぬよう緊め取り、左の乳房は養育のために残しておくのであった。ヒッポリュテーは他のすべての女たちの第一人者であるしるしとしてアレースの帯を持っていた。エウリュステウスの娘がそれを欲しがったので、ヘーラクレースがこれを獲得すべく遣わされたのである。そこで志願者の仲間を得て、一艘の船に乗ってテミスキューラにある港に入港すると、彼のところへヒッポリュテーがやって来て、何のために来たかをたずね、帯を与える約束をするが、ヘーラーがアマゾーンの一人に身を変じ、異邦人どもは女王を奪って行こうとしているとふれながら群衆の中を歩き回ったため、彼女らは武装して馬に跨がり、船にむかって殺到した。彼女らが武装しているのを見て、ヘーラクレースは謀られたと考え、ヒッポリュテーを殺し、帯を奪い、他の女たちと戦って後出航した<sup>1</sup>。

また、このヒッポリュテーについては異説があって、テーセウスはヘーラクレースと共に遠征し、シモーニデースによればヒッポリュテーを奪った。それでアマゾンたちはアテーナイに軍を進め、アレースの丘に陣を張ったが、テーセウスはアテーナイ人と共に彼女らを破る。このアマゾンより一子ヒッポリュトスを得たにもかかわらず、その後デウカリオンよりミーノースの娘パイドラを得た<sup>2</sup>。彼女との結婚が行われている最中、前にテーセウスと結婚したアマゾンが他のアマゾンたちと共に武装して現れ、宴に集まった客人たちを殺そうとした。しかし彼らは急ぎ扉を閉じ、

彼女を殺した。しかし一説によれば彼女は戦闘の間にテーセウスの手にかかって死んだとも<sup>3</sup>、或いは「誤って戦友のペンテシレイアの手にかかって死んだとも」<sup>4</sup>言われている。この説によれば、ペンテシレイアは誤ってヒッポリュテーを殺し、プリアモスに罪を潔められたが、戦がおこるや多くの者を討ち取った。ついで後、アキレウスに討たれたが、彼は彼女の死後このアマゾンに恋し、彼を嘲ったテルシーテースを殺した<sup>5</sup>。死にぎわの女王の顔の美しさにうたれ、彼女の死を嘆いたのだという。

アマゾンについての概要が、ここに述べられていると言えよう。

### 古代ギリシアのアマゾン

ギリシア最古の、少なくとも紀元前 800 年以前の叙事詩、ホメーロスの『イーリアス』で、トロイアの王プリアモスは、彼の過去の戦いについてヘレネーに語るなかでアマゾンとの戦いにふれ、「あの、ますらおにも劣らぬ、アマゾンたちが攻め寄せてきた秋のこと」<sup>6</sup>と言っている。また、王プロイトスがベレロポンテースを追い払おうとしながらも、自分では殺しかね、さまざまな難題を与えるようにと書いた書状を持たせて舅のところへ行かせた時、ベレロポンテースに与えられた難題の二番目は「男にも匹敵するアマゾン女軍」<sup>7</sup>を倒すことであった。ここで「ますらおにも劣らぬ」「男にも匹敵する」とうたわれているのは、武勇においてであろう。

紀元前 5 世紀のピンダロスは、ヘーラクレースがアマゾンの帯を求めたことを簡潔に記している<sup>8</sup>。また彼のオリュンピア、ネメアなどの勝利歌の中には、「上質の馬持てるアマゾン」<sup>9</sup>「真鍮の弓持

てるアマゾン」<sup>10</sup>、「アマゾーンの射手女軍」<sup>11</sup> など、いくつかアマゾンへの言及があり、戦闘集団としてのアマゾン像が浮かんでくる。

紀元前6世紀ギリシアの三大悲劇詩人の最初の人アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』には、イオの未来を彼女に語るプロメテウスの言葉の中に、「男嫌いのアマゾン」という表現がある。「南の方へと旅路をお前はたどってゆくのだ。そこで男嫌いのアマゾーンの女隊に出くわすだろう、彼らはいつの日かテルモドンのほとりなるテミスキュラに居を定めよう……」<sup>12</sup>

『救いを求める女たち』には、「弓矢を持って……男嫌いで、肉を啖う」というアマゾーンの表現がある。「弓矢を持っておいでだったら、あの男嫌いで、肉を啖うというアマゾンたちに、よもや違いはあるまいと、あなた方を思いなしたろう。」<sup>13</sup> これは、ダナオスの弟アイギュプトスの50人の息子との縁組を嫌ってアルゴスへ逃げてきた、ダナオスとその50人の娘たちを見たアルゴスの領主が、彼女らを見て言った言葉である。「弓矢を持つアマゾン」とは、すでに定着したイメージであろうが、「男嫌いで肉を啖う」というのは新しいイメージだ。

また『慈みの女神たち』にある、「アマゾンごときの勢い烈しい遠矢にかかり」<sup>14</sup> と語るアポローンの言葉、またアテーナーの語る「その昔、アマゾーンの女軍が、テーセウスを恨みに思い攻め寄せたおり、陣を置き……ここに新しい城塞を、そのおり塁壁も高々と、城山に拮抗して築き上げ、アレース神に献げたのであった、それからして名も、アレースの岩山と呼びならわしたが……」<sup>15</sup> というアレースの丘の故事来歴から浮かんでくるのは、弓矢の技にすぐれた戦闘集団としてのアマゾン女軍のイメージだ。なにしろアレース

とは、戦の神なのだから。

後にプリニウスによって「アマゾーンの夫たち」と呼ばれるサウロマタイ人について、紀元前5世紀のギリシアの歴史家ヘロドトスに次のような記述がある。アマゾーンの事をスキュティア語ではオイオルパタと言う。これはギリシア語に訳せば「男殺し」という意味の言葉である。ギリシア人がテルモドン河畔の戦で勝利をおさめ、捕えたアマゾンたちを三艘の船に乗せてひきあげたところ、アマゾンたちは海上で男たちを皆殺しにしてしまった。彼女らは船を知らず、舵を使うことも帆や櫂を操ることも出来なかったため、波のまにまに漂流し、自由なスキュタイ人<sup>16</sup>の領土に漂着した。アマゾンたちは上陸すると、人里へ向かい、はじめて出会ったのが馬の群れだったがこれを奪い、それからは「騎馬」でスキュティア人のものを略奪し始めた。スキュティア人たちはアマゾンを年若い男と思い、彼女たちに戦をしかけ、戦い終って死骸を見てはじめてそれが女であることを知った。それからは決してアマゾンを殺さないことにし、青年たちをアマゾンと同数、彼女らのもとにさしむけた。青年たちはアマゾンの近くに野営し、アマゾンが追って来ると逃げ、追うのをやめるとまた戻ってきて近くに野営した。スキュティア人はアマゾンによって子をもうけたいと思ってこのような作戦をとったのである。青年たちは指令どおりに行動し、アマゾンたちも彼らが害意を持たないことを知ると、彼らをかまわなくなり、こうして毎日、だんだん双方の野営地が接近していった。青年たちも彼女らと同様、武器と馬しか持たず、狩猟と略奪を事とする生活をおこなった。

年ごろになってアマゾンたちは、一人ないし二人ずつお互いに遠く離れて用足しをするという習慣を持った。青年たちはこれを知

るとその真似をし、その一人が独りになった時アマゾンに近づくと、女は拒まず男のするままに身を任せ、言葉は通じなかったが手真似で、翌日仲間を連れて同じ場所へ来るように伝えた。その青年はこのことを他の者たちに話し、翌日もう一人の仲間を連れて行くと、アマゾンも仲間と共に待っていたのである。そのことを知ると、他の青年たちも他のアマゾンたちを手懐けてしまった。それからは、野営地をあわせて一緒に住み、青年たちはそれぞれはじめて関係を結んだアマゾンを妻にした。男は女の言葉を覚えることが出来なかったが、女は男の言葉を理解するようになった。男たちがアマゾンに、自分たちには親もあり財産もあるから、皆のいるところへ帰って一緒に住もう、我々はおまえたちを妻にし、決して他の女を娶るようなことはしないからと言うと、アマゾンたちが答えて言うには、「私たちはどうていあなた方の国の女たちと一緒に住むことはできますまい。私たちとお国の女たちとは習慣が違うのです。私たちは弓も引き、槍も投げ、馬にも乗りますが、女のする仕事は習っておりません。ところがお国の女たちは今いったようなことは何もせぬ代りに、狩にもゆかず、ほかにも外出はせずに、いつも車の中にいて女の仕事に精を出しています。ですから私たちにはとてもあの人たちと折合ってゆくことはできそうにありません。もしあなたがたが私たちを妻にしておきたいと思われ、しかも誰の目にも恥ずかしい振舞いをせぬことをお望みなら」親許へ行って財産の分け前をもらい、その上でまたここへ帰って来て私たちだけで生活しようというのである。青年たちは女の言ったとおりにした。すると女たちは今度は、自分たちは、青年たちを親から奪ったばかりでなく、国をさんざん荒らしまわった身であるので、この土地に住むのが恐ろしくもあり心配でもあるので、この土地を離れてタナイス河の向こうへ移って住もうと言い、青年たちはこの申し出

も容れた。この時以来、サウロマタイ人の女は祖先の生活習慣をそのまま守り、馬に跨がって男と共に、あるいは自分たちだけで狩猟に出かけ、また、男と同じ服装をして戦場に出た。この国では、どの娘も敵を一人討ち取るまで嫁に行かないので、中には、この掟を満たすことが出来ないため、嫁に行く前に老いて死ぬ娘もある。<sup>17</sup>

以上のヘロドトスによる記述で注目したいのは、青年たちが妻にするから親許へ帰って共に住もうと申し出た時のアマゾーンの答である。彼女たちは、お国の女と自分たちとは違うのだから、一緒に住むことは出来ないだろうと答える。自分たちは「弓を引き、槍を投げ、馬にも乗るが、女のする仕事は習っていない」。ところが、青年たちの国の女たちはいつも車の中にいて女の仕事に精を出している。これは、アマゾンが「馬に跨がって男と共に、あるいは自分たちだけで狩猟に出かけ、また、男と同じ服装をして戦場に出た」という点と共通する内容の事柄である。そしてもう一つ、ここにあるのは、男の土俵に入り、男の流儀を自分の流儀として暮らすという従来の女ではなく、男をその土俵の外に出し、自分の土俵に入れ、自分の流儀を生かそうとする女の姿であることだ。男の動きにあわせるために自分の生き方を変えるというやり方、すなわち流体論を生みだした土壌とは程遠いやり方である。

紀元前3世紀のロドスのアポロニオスの『アルゴ船物語』には、盲目の予言者ピーネウスが、アルゴ船の乗組員たちに彼らの行く手にあるものについて語る中に、アマゾンについての記述がある。そびえたつ岬を過ぎると、次にはテミスキューラ岬の静かな湾にテルモドン川の水が流れこみ、その平原にアマゾンの三つの都市がある。そこを過ぎると平坦な島に着く。そこは貪欲な鳥どもの生息する島であるが、その島に、アマゾンの女王たち、すなわ

ちオトレレーとアンティオペが、戦に出る時、石でアレースの神殿を建てたのである。<sup>18</sup> アルゴ船の乗組員たちは、ピーネウスの言ったとおりアマゾン岬に着く。かつて、「アレースの娘」メラニッペが、アマゾンたちの港を護っているアマゾン岬を出た時、待ち伏せていたヘーラクレスに捕えられ、ヒッポリュテは妹の身の代として自分の輝く帯を彼に与え、かくしてメラニッペの身柄は無事返された。ここはテルモドーンの河口である。アマゾンたちは「おとなしい輩ではなく、正義に留意せず、おそろしく無礼で、アレースの業のみが彼女らの関心事」であった。彼女らは「アレースとニンフのハルモニアの娘たち」で、ハルモニアはアレースに「好戦的な乙女」を生んだのである。アマゾンたちは、一ヶ所に固まって住まず、三つの部族に別れて住んでいた。すなわち、その頃ヒッポリュテが治めていたテミスキューラのアマゾン、リュカストスのアマゾン、そして投げ矢を使うカディシアのアマゾンである。そこに長居すればアマゾンとの流血沙汰は免れなかったであろうが、風が吹いてきたため、アルゴ船の乗組員たちはそこに長くはとどまらず出発し<sup>19</sup>、アレースの島に着くと、彼らは、犠牲の羊を捧げるために、その昔アマゾンたちが祈った、屋根のないアレースの神殿の外側、黒い石の中に小石で造られた祭壇を囲んだ。<sup>20</sup>

以上の記述から、アマゾンが「アレースとニンフのハルモニアの娘」であること、「おとなしい輩ではなく……アレースの業のみが関心事」であり、アレースを祭っていたことがわかる。

前世紀のシチリアの歴史家ディオドロスは、スキュティアの歴史を、神話的起源から、スキュティアの被征服民族でありながら強大になったサウロマタイをも含めて語る中で、スキュティアにおけ



る革命期、すなわち、例外的勇猛さを持つ女たちが統治者となった時期について述べ、ここでは、男と同様に女も武術の訓練を行い、勇敢さにおいても男に劣らず、数々の武功を立て、このアマゾーンの国は、ひとたび組織化されると、卓越した武勇によって隣接する国々を征服し、ヨーロッパ、アジアの大部分を征服したことを述べている。彼の語るアマゾーンの歴史とは次のようなものであり、生活様式、習慣について、他のどの著述家の語ったものよりも詳しい。

テルモドン川沿いの国では、「女が権力を握り、男のように兵役についた」。この女たちのうちの、武勇と体力において特に秀でた一人の女が統治し、武術の訓練を施し、隣接する部族を征服した。彼女はとて誇り高く、自分を「アレースの娘」と呼んだ。彼女は、「男には羊毛を紡ぐなどの女の仕事を割り当てた」。また掟を定め、女を戦に出し、男には恥辱、隷属を与えた。男の子は四肢を不具にし、女の子は、成長してからふくらまないよう右の乳房を焼いたが、そのために「アマゾン(乳なし)」という名を得た。この女王は、知力、能力全般において大変優れ、テルモドン川の河口にテミスキューラという名の大都市を建設し、有名な宮殿を建てた。タナイス川までも征服したが、ある戦いで雄々しく戦って死んだ。その娘が女王の座を継いだ。ある点で母を凌ぐほどであった。彼女はごく幼児期から乙女たちに武術の訓練を施し、「アレースとアルテミスに捧げる大祝祭」を制定した。タナイス川を超えて領土を拡張、故国に帰ると「アレースとアルテミスに捧げる神殿」を建造し、善政を敷いた。この女王の死後、その親族の女性が王位を継いで領土を拡張、その何世代か後、ヘーラクレースがヒッポリュテーの帯を求めてやって来た時、ヒッポリュテーと帯を奪い、アマゾンを壊滅状態に追い込んだ。隣接の蛮族どもは弱体化したアマゾンを侮り、過去の遺恨をもって攻め寄せ、アマゾン族という名さえ残ら

ぬほどに滅ぼし尽くした。ヘーラクレスが攻めて来て数年後、生き残った最後の武勇すぐれたアマゾーンは、「アレースの娘」であるペンテシレイアであったが、彼女は親族の一人を殺し、神聖冒瀆罪で故国を離れた。そしてヘクトールの死後トロイア側について戦い、アキレウスの手にかかって死ぬが、彼女がアマゾーン最後の女王である。これ以後アマゾーンは弱体化の一途をたどり、ついには全くその力を失った。<sup>21</sup>

別の箇所、ヘーラクレスがヒッポリュテーの帯を求めてアマゾーンの国へ遠征し、アマゾーンと戦ったことが、彼の倒した主だったアマゾーンの名をあげて語られている。ヒッポリュテーの帯を求めてとは言いながら、ここではアマゾーンの指導者はメラニッペとなっており、ヘーラクレスはアマゾーンの大半を殺し、残りを敗走させ、アンティオペを捕虜にしてテーセウスに与え、メラニッペについては、帯を身の代として自由の身にした<sup>22</sup>。

ディオニュソスがクロノスとの戦いでアマゾーンをアテーナーの下において戦力にしたことを述べた箇所、アマゾーンたちは戦に加わることをアテーナーに要請されている。というのは、「男性的な勇気と純潔」に忠実であるという点で、彼女らの生き方の理想に対する熱意が、アテーナー自身のものと似ていたからであるという。<sup>23</sup>

またディオドロスは、テルモドーンのアマゾーンとは別の、トロイア戦争よりもずっと以前リビアにいたアマゾーンについても、ディオニュシオスの述べるところに従って語っている。それによれば、リビアに好戦的な活力を称賛されていた女たちの種族がいた。一人の女が統治者であった。そこでは、女が武芸を磨き、一定期間兵役につき、その間は純潔を保ち、兵役を終えると子を得るために男のもとに行くが、その間も執政官職その他国務すべてを握っている。男は、我々の生活における既婚女性のように、家で日を過ごし、

妻に与えられる指示に従う。彼らは戦には出ず、国務に携わらない。子が生まれると男に渡され、ミルク、食事を与える等の育児は男にまかされる。女の子が生まれると、戦の時にふくらみが邪魔にならないよう、発育を妨げるため乳房を焼いた。このためギリシア人にアマゾンという名を与えられた。アマゾンは、近隣のリビア人を征服し、大都市を建て、そこから船出して、そのあたりで最も高度な文明を持っていたアトランティス人をはじめ、多くの部族と戦う。女王ミュリーネーは3000人の歩兵と3000人の騎兵の軍隊を募った。というのは彼女らは戦に於いては騎兵を好んだからである。彼女らは防御のために、あたりに生息する大蛇の皮を用い、武器として、刀、槍、弓矢を用いた。都市を破壊し、捕虜を残虐に扱い、それにおびえて降伏し、貢ぎ物を差し出したアトランティス人とミュリーネーは友好関係を結び、破壊した都市の跡に新たに都市を建設し、自分の名をとって名づけ、捕虜や、居住を望む現地人を住まわせた。ミュリーネーは、しばしばゴルゴーン族の攻撃に悩まされていたアトランティス人の頼みで、ゴルゴーン族の土地に攻め入り、多くを殺し、多くを捕虜にした。アマゾンたちが勝利に酔って見張りの目をゆるめたところ、捕虜の女たちがアマゾンの刀をとって彼女らを殺した。捕虜たちは勇敢に戦ったがみな殺しにされ、ミュリーネーは死んだ戦友たちの葬儀のために三つの薪の山を用意し、墓として大きな塚を三つ築き、それは今日まで「アマゾン塚」と呼ばれている。後にゴルゴーン族は再び強大になり、今度はペルセウスに征服された。そしてゴルゴーン族もアマゾンも、ヘーラクレースがこの辺りを訪れた記念に、リビアに柱——ジブラルタルのヘーラクレースの柱——を建てた時、彼によって征服される。というのは彼は、「女の支配する民族を許容することは、人間すべての保護者であろうという自分の決意にそぐわない」と感じ

たからである。ミュリーネーに関して言えば、彼女は勢力を拡げ、当時エジプト王であった、イシスの息子ホルスとも親交を結んだ。数々の都市を建設し、その都市に自身の名、および最も重要な部署を受け持っていた女たちの名に因んで名をつけた。彼女はまた、いくつかの島々をも征服し、中でもレスボス島には都市を建設し、妹の名をつけた。島々をめぐる時に嵐にあい、神々の母に助けを求め、ある島にたどり着いたことから、その島を女神に捧げ、祭壇を築き、犠牲を捧げ、ギリシア語で「聖なる島」という意味の名をつけた。後、トラキア王に追放されたトラキア人たちがアマゾーンの国に侵入し、激戦の後ミュリーネーとその軍勢の大半は殺された。<sup>24</sup>

### 紀元1世紀のローマ、ギリシアのアマゾン

紀元1世紀のローマの著述家プリニウスは、『博物誌』に、世界各地の都市および種族について記し、「タナイス河〈ドン河〉とその先の海岸」の項で、その河口に住む「アマゾンたちの夫たちであった女族長族のサウロマタイ族」にふれている。<sup>25</sup> また「スキタイ洋沿岸の諸種族」の項では、「アマゾン種族は、カスピ海すなわちヒュルカニア海に達して」いた<sup>26</sup>と述べている。プリニウスは、この種族がどのようなものであったかについては述べておらず、ただその居住地域にふれているのみである。

紀元1世紀末期ギリシアのプルタルコスは、テーセウスの生涯を語る中で彼とアマゾンとの関わりを述べている。テーセウスはヘーラクレースと共にアマゾン族を攻撃した時、黒海に乗り入れ、その報酬としてアンティオペを手に入れたという。プルタルコ

スは他の著述家による記述をも記し、ヘロドトスなどによれば、テーセウスが自分の船で航海してこのアマゾンを捕虜にしたのはヘラクレスより後の時代のことだと言っている。ビオンによれば、テーセウスはアンティオペを欺いて捕えたのである。すなわち「話によれば、アマゾンたちは生れつき男好きなので」テーセウスがこの国に着いた時も逃げ隠れせず、かえって贈り物をしたのだが、贈り物を持って来た女を船に乗れと誘い、その女が船に乗ると出帆したのだという。またピテュニアにある都市ニカイアの歴史についてメネクテスなる人物の語るところでは、テーセウスはアンティオペを連れてこの地方にしばらく時を過ごしたが、その時アテネから遠征していた若者の一人がアンティオペに恋し、そのことを打ち明けられた親友がアンティオペに会うと、彼女はその申し入れを手酷くはねつけ、しかしそのことについては黙っていた。その若者が絶望して川に身を投げて死んだ後、テーセウスははじめてその原因を知り、若者の苦痛を知って心を痛め、他所の国でひどく悩み悲しむことがあれば、そこに都市を建設して、自分のまわりの者から指導者をそこに残しておくようにという、かつてデルフォイのピュティアから申し渡された神託を思い出し、ここに都市を建設しピュティアの神に因んでピュトポリスと名づけた。<sup>27</sup> また、アンティオペのことが発端となって戦争となり、テーセウスは攻めて来たアマゾン軍と戦ったが、四ヶ月目にヒッポリュテによって和議が成立したという。

ここにあらわれたアマゾンについての新しいイメージは、「生れつき男好き」という記述である。もっともここに述べられているアンティオペは、他の著述家の著述では、ヒッポリュテとなっているが、ここでのアンティオペは夫以外の男の口説きを拒絶した貞節な女として語られている。

紀元1世紀のローマの歴史家タキトゥスの『年代記』に、スミュルナの代表がスミュルナの話来歴を語る中に、その「創立者はゼウスの息子タントロスか、あるいはこれも神の血をひくテーセウスか、それともアマゾーンの一人か、そのうちの誰かである」<sup>28</sup>と、アマゾンへの言及がある。ここには、とくにアマゾーンの特質に関する言及はない。エペソスの市民の語るエペソスの話来歴には、アポロンとアルテミスの兄妹神が生まれた場所であるがゆえに免罪聖域と定められた杜についての記述があり、「ディオニューソスが戦いに勝った時、アマゾンがこの杜の祭壇を占有し、嘆願したため、彼らの命を許してやった」<sup>29</sup>とある。ここに出てくるアマゾンは、戦いに関わるものである。

4世紀の叙事詩人スミュルナのクイントゥスの『トロイア陥落』に、アキレウスがペンテシレイアを倒した後、彼女に恋するエピソードが比較的詳しく述べられている。この中では、また、ペンテシレイアが「軍神アレースの娘」であること、彼女が「槍、斧を武器として馬上で戦った」ことが述べられている。娘がアキレウスに倒されるのを見ていたアレースは、悲しみと怒りにもだえ、地上に飛んでいこうとするが、ゼウスの放った雷に行く手をはばまれる。ゼウスには逆らえずアレースはとどまるが、勇者たちの手をアキレウスの血で染めたいという衝動にかられる。

鎧を着たまま大地に横たわる彼女は、女神アルテミスが眠っているように見えた。彼女は死してなお、戦の神の花嫁アフロディーテによって驚くべき美しさを与えられていた。アキレウスは、自分が妻にして連れ帰ることもあり得たかも知れない、これほど強く美しい者を殺してしまったことに深い後悔の念をおぼえ、また強い恋慕の情にかられ、悲しみにもだえつつ彼女の顔を見つめていたと

ころ、テルシーテースが、女の美に淫することは、男を破滅させることだと嘲り、これに対しアキレウスは、怒りにかられてテルシーテースを打ちのめし、殺してしまう。

トロイアの者たちは、彼女の遺骸を引き取り、この「戦好きな乙女」を、彼女の武器と彼女の馬と共に、老ラオメードーンの大土塁に葬りたいというトロイアのプライアム王の願いで、城門の外に積み上げた薪の上に乗せ、火葬にし、葡萄酒で火を消し、骨を拾って軟膏を注ぎ、箱におさめてその後、老ラオメードーンの葬られている傍らに葬り、彼女の傍らには、戦で死んだアマゾンたちを葬った。このような栄誉を、彼らは、戦の神とペンテシレイア自身のために与えたのである。<sup>30</sup>

「女だてらに女の仕事をせず、武器をもって、強い男もひるむ戦に出ようとしたのは、お前の過ちだ」というペンテシレイアを倒した時のアキレウスの嘲りは、死してなお神の子のように見えるほどの比類のない美しさのゆえに、恋に変わるのである。「戦好きな」と形容される彼女の特質は、伝統的なアマゾーンのイメージであるが、それが、ここで彼女の美しさに焦点があてられ、恋という文学的主題を与えられている。

### ルネサンス期イタリア、イングランドのアマゾン

ルネサンス期イタリアのアリオストの『狂えるオルランド』で、アストルフォやマルフィーサたちを乗せた船が、嵐に吹き寄せられて上陸した国は、女たちの支配する国であった。そこでは難破船がたどりつけば、全員殺されるか、さもなくば捕虜にされるかであるが、もし、難破船側の男一人が、アマゾン側の男10人と戦って勝ち、さらにその晩ベッドで10人の女を満足させることが出来れば、

その者はこの国にとどまって女との共同統治者になり、他の者はこの国を去ることを許される。もしその者がどちらかの戦いに負ければ、その者は殺され他の者は捕虜になるというのが掟であった。そこで騎士たちは、戦う者を決めるため、二つ目の試練を受ける資格に欠ける(女)騎士マルフィーサを除外してクジを引こうとするが、マルフィーサは自分も加わることを主張し、その結果クジにあたる。彼女は、最初の戦いで9人を倒し、大将格の騎士と戦うが、決着がつかず、度量の広いその騎士の提案で、勝負は翌日に延ばし、その夜は、殺された9人の騎士たちの——各々10人の妻を持っていたので、合計90人の——妻たちの復讐を避けるため、一同、唯一安全な場所である彼の宮殿に泊まることになる。宮殿に着いて武装を解くと、マルフィーサが女であることが相手の騎士に明らかになる。おたがいに名のり合い、騎士は、エイモン公爵の息子ギドーネ・セルヴァッジオと名のり、問われるままに、この地が、男が少なく女が多い国になったいきさつを次のように語る。

トロイア遠征に赴いたギリシアの男たちが、20年の後に家に帰ってみれば、留守中の妻たちの不貞ために、家中私生児だらけというありさまであった。夫たちが妻を許し、私生児を家から追い出したところ、私生児たちは、クリタイムネーストラの息子で18才になるファランサスを中心に、100人の一団となって船出する。その頃僭主を追放したばかりのクレタ島人が、護衛のために彼らを傭うと、クレタの女たちは若者たちの美しさに心を奪われ、若者たちと遊びをむさぼる。クレタ島人が、若者たちを解雇すると、女たちは、父や夫、息子たちを捨て、金や宝石を持って彼らについて家を後に船出するが、若者たちは、とある浜辺に上陸し、休息を取り、女たちを十分に楽しんで、飽きると女たちを浜辺に置き去りにする。残された女たちは今後の生き方を思案し、その中の一人、ミノスの直



系で、最も若く美しく賢いオロンテアが、土壌豊かで気候も良いこの地にとどまり、すべての男たちに復讐することを提案する。港を求めて船が来れば、略奪した後焼き払い、男たちは殺すという掟を定め、以後オロンテアが女王となって君臨する。こうして男の敵となって数年が過ぎると、このまま子が生まれなければ王国は衰えるというので、苛酷さをやや和らげ、この地に流れ着いた者のうち10人の精力的で容姿端麗な騎士を選び出し、100人の女がいたので、一人の男を10人の女の夫として愛し、統治権も共にし、ただ他の男たちを殺すことを誓わせた。「戦うために選ばれた10人を除いて、武器の携帯は男には許されず、他の者たちは、糸巻き棒、紡錘、すき櫛、針、機などを手にする仕事に携わり……地面に届くほどの長い衣を身につけ、忍耐強く耕し……家畜の群れの番をしている。男の数は女の数の10分の1である(第19篇72連)」。子供が生まれると、妻たちは、男の子が多すぎれば再び「男に隷属する生活(第20篇32連)」になるとおそれ、「自由の喜び(第20篇32連)」を失わないよう、母親たちは、自分の子供のうち男の子を一人だけ残し、他は殺すか、女の子と取り替えるという残酷な掟を定めた。自分たちの獰猛な「種の補充と存続のため(第20篇34連)」に男の助けを必要とするのでなければ、母でありながら、自らの種族の一人の男の子も生かしておかないという苛酷さであった。外国人については、まず投獄し、一日一人ずつ、クジにあたった男を、神殿の復讐の女神の前で殺すのを習慣にした。

ある時、このクジにあたったヘーラクレースの子孫エルバニオという男が、容姿端麗で、声も、身のこなしも、話しぶりも、蛇さえ魅了されるほどであることが、オロンテア女王の娘アレッサンドラに知らされ、彼女は、好奇心から彼を見たいと母にせがみ、許されて彼を一目見るなり、恋に心を貫かれ、男に対する敵意は消え、虜

にした男の虜となってしまう。彼は、「騎士である自分は、罪人や犠牲獣のような死に方はしたくない、剣を手に死にたい、武装した10人に喜んで立ち向かう」と彼女に訴える。彼女は、オロンテア女王を説得し、女王は娘への愛情から会議を開き、「難破した者の中から、最強、最良の者を選び出すのが、自分たちの義務である」と述べ、古参顧問官の反対意見を押し切って、10人との武器による戦い、さらにその晩の10人の女とのベッドでの戦いという二つの試練をエルバニオに与えることを決める。彼は二つの試練に耐え、オロンテアは娘アレッサンドラを花嫁として彼に与え、後にこの国はアレッサンドレッタと名づけられる。以後この浜に流れ着いた者には、死か、10人を相手の戦いかの二者択一の機会が与えられ、一人で10人を相手に戦って勝ち、さらにその晩の10人の女を相手のベッドでの戦いにも勝利を納めれば、彼は王、また顧問官としてこの国にとどまり、9人のチームを編成する権利を有し、より強い者が彼を倒すまでこの国にとどまる。こうして2000年の間、この掟が守られてきたとギドーネは語り、自分は前任者を倒して王となったが、遊びも、愛の歓びも、宝石も、豪華な住まいも、優先権も、自由の代償にはならないと嘆く。アストルフォは、ここに至って名を名乗り、自分がギドーネのいとこであることを明らかにする。みな、誰かの犠牲によって自由を得ることは忍びがたく、マルフィーサも、「自分が女であることがわかれば、自分は女たちに敬われ、すすんで助力を求められるだろうけれど、自分は信頼する友人たちと共に来たのだから、友人たちには与えられない好意を自分だけが受けようとは思わない」と、共に戦う事を宣言する。一同助かる方法を協議し、ギドーネの提案で、彼を愛し彼と共に自由を得たいと願う、彼の信頼する妻の助けを得て、男は城塞の外に出る事は禁じられているため、彼女に夜の闇にまぎれて必需品を積み込んだ小舟を浜辺

に用意させておき、翌日女どもをみな殺しにして小舟で逃げようと相談がまとまり、ギドーネの妻の用意した、槍、剣、盾、鎖帷子などの武器を身につけ、戦いに赴く。彼らの逃亡の意図に感付いた女たちとの戦いで、決着がつかず、アストルフォは角笛の出番とばかり、その音を聞いた者はみな恐怖のあまり無力になる魔法の角笛を吹き鳴らし、角笛が響きわたると、それまで勇敢に戦っていた騎士たちは突如気弱になって逃げまどい、ほうほうの体で海辺の小舟にたどり着く。戦場を駆け回って角笛を吹き鳴らしていたアストルフォが海辺に着いた時には、船はすでに出帆した後だった。(第19篇54連～第20篇第97連)<sup>31</sup>

アリオストよりおよそ80年遅れて生まれたルネサンス期イングランドのスペンサーは、『妖精の女王』第5巻でアマゾンを登場させている。第5巻の主人公「正義」の騎士サー・アーティガルは、暴君に財産を奪われたと援助を求めてきた貴婦人を救う任務を妖精の女王から与えられ、救援の旅の途中、首に絞首刑用の綱を巻きつけられ、後ろ手に縛られた騎士を武装した女たちから救い出し、ラディガンドというアマゾンの女王が、アーティガルの属する処女騎士団に忠誠を誓う騎士たちすべてを敵として、その幾人かを辱め、多くを死にいたらしめたことを知る。彼女の男に対する憎しみは、ある勇士が彼女の恋にこたえないことから生じたもので、腹いせに、彼女は力づく、あるいは策略によって屈伏させた騎士たちから「武具をはぎとり、女の衣装を着せ」、食物を得んがために「紡いだり、すいたり、縫ったり、洗ったり、絞ったり」の仕事を無理にやらせ、復讐を企てないようにパンと水しか与えない。それに従わない男は即座に絞首され、その騎士もそうなるところだったのである。アーティガルはラディガンドを倒すべく、彼女の治めるラディ

ゴーンへ赴き、アマゾンたちと戦うが、決着がつかず、ラディガンドは、敗者が勝者の掟に従うという条件で、一騎打ちを申し出る。彼は激しい戦いの末に彼女を気絶させるが、首をはねようとして兜を取った時、彼女の美しさにうたれ、戦闘心をなくし、息を吹き返した彼女にいわば自ら進んで屈伏し、捕われて彼女の奴隷となる。すると彼女は彼から騎士の誉れのしるしをすべてはぎとらせ、女の服を着せ、エプロンをかけさせ、騎士たちが同様の姿で仕事をしている部屋に連れて行き、糸巻き棒を持たせて、麻を紡ぐように命じ、彼はいやいやながらそれに従う。そのうち、彼女は彼を愛しはじめる。虜とした男を愛することに高慢な彼女は苦しみながら、侍女に打ち明け、愛の成就のため助力を求めるが、侍女も彼を愛し、彼は二人に愛想のよい顔をしながらも、婚約者に不実を働く気はない。

(第5巻第4篇21連～第5篇57連)

三ヵ月後には帰ると言って出発したアーティガルが三ヵ月たっても帰って来ないため、不安と妄想による嫉妬に苦しめられていた彼の婚約者「貞節」の(女)騎士ブリトマートは、ラディゴーンから逃げてきた彼の部下から彼が女に捕われたと聞かされると、女の愛の虜になったと誤解し、怒り、恨み、嘆き、悲しみ、激しい発作に苦しむが、事情がわかると、怒りと悲しみにおそわれ、アーティガル救出のため出発する。彼女はアマゾンの国に到着し、猛烈な戦いの末にラディガンドを倒す。彼女はアーティガルの捕えられている牢獄を捜し当てると、女の服を纏い、女の仕事をしている彼の姿に恥ずかしさをおぼえ、別室で騎士の姿に戻すと生き返った気持ちになる。女王として国の政体を変革し、女たちを男に服従させ、捕われていた騎士たちにアーティガルへの忠誠を誓わせる。(第5巻第7篇24連～45連)<sup>32</sup>

先に紹介したアリオストの女の国では、戦うために選ばれた10人を除いて男に武器の携帯は許されず、男たちは、糸巻き棒、紡錘、すき櫛、針、機などを手にする仕事に携わっている。これは前世紀、ディオドロスの語ったアマゾーンの国での男のありようと同じだ。スペンサー描くところのアマゾーンの国での男の描写は、ほぼアリオストのものと等しく、アリオストから借りたものと思われる。また、アマゾーンの女王が自分の国を訪れた騎士に、負ければ自分に仕えよという条件を出して戦いを始めるエピソードも似かよっている。女王が虜にした騎士に恋するエピソードの原型もアリオストの中にある。もっとも、一人で10人を相手にする戦い、および、ベッドでの試練のエピソードは省かれている。アリオストの、物事にとらわれない想像力は、10人の敵と武器をもって戦い、さらに、その夜10人の女を相手に、ベッドでも強い男であることを証明するという、笑いを誘う試練を考えだしたが、スペンサーの清教徒的慎み深さ、あるいは、こちらの方がより有り得る理由であろうが、おそらく時のイングランド女王エリザベス一世および宮廷人の目にふれる事を意識しての慎みは、二つ目の試練を削除した。

## むすび

紀元前の古代ギリシアから、ルネサンス期イタリア、イングランドまで、様々な著述、作品に表わされたアマゾンのエピソードをたどってきた。もっとも、中世のアマゾンにはふれていないが、アマゾン関係の中世の文献を、筆者は寡聞にして知らない。古代ギリシア人の想像力をかきたてたアマゾンは、ルネサンスという古典古代の復活の時代を迎えて、再び甦ったかのようである。

こうして、古代からルネサンスまでの様々なエピソードをたどっ

てみると、初めの頃の、特に歴史家の著述に見られる、変わった風習を持つ珍しい種族がいるといった体の記述から——そういった記述には、エピソードの紹介はあっても、人の感情にまではふれていないのが常であるが——変わった風習を持つという点は変わらなくとも、その人間感情にふれ、いわば文学的テーマといったものが与えられるようになってきていることがわかる。初めは猛々しさ、「好戦的」である点だけが強調されていたきらいがあるが、「テルモドーン川」の「テミスキューラ」あるいは「タナイス」に居住する、「刀」「槍、斧を武器として馬上で戦う」「ますらおにも劣らぬ」「男嫌いの」「弓も引き、槍も投げ、馬にも乗るが、女の仕事は習っていない」「おとなしい輩ではない」「アレースの業のみが関心事」で「アレースとアルテミスを祭る」「アレースとハルモニアの娘たち」というアマゾンが、4世紀のスマイルナのクイントゥスに至って、ペンテシレイアの美しさのゆえに、勇士アキレウスが彼女を倒した後恋するという文学的テーマを与えられ、騎士道はやかなしり中世を経たルネサンス期においては、騎士がアマゾンの国を訪れるという設定に、戦闘集団としてのアマゾンの特質とアマゾンの国での男と女のありようは残し、エピソードに広がりと変化を加えられている。

アリオストの女の国での女、そして男のありようは、ディオドロスの語ったテミスキューラのアマゾン、そしてリディアのアマゾンの国での男と女の関係と基本的には同じだ。古代のアマゾンを語る文献には、アマゾンの恋について述べているものはない。少なくとも筆者があたった限りでは見あたらない。ストーリー展開のおもしろさにおいて他の追隨を許さないアリオストは、それまでのアマゾン像をふまえながら、奔放な想像力によってエピソードに全く違った趣を与え、そして、アマゾンの恋、それもお

そらく本物の恋という、いかにも人間的なエピソードを生み出した。そしてルネサンス期イングランドのスペンサーは、ディオドロスの記したアマゾンの国での男と女のありようを、直接、あるいはアリオスト経由で取り入れ、アリオストのある部分を受け継ぎながら、アマゾンの女王ペンテシレイアを倒したアキレウスが、彼女の死後彼女の美しさにうたれて恋するというエピソードも取り入れ、それを、戦いで気絶したアマゾンの女王の美しさにうたれて戦闘意欲を失った男を、女王が息をふきかえして虜にし、女の姿で女の仕事をさせるが、虜にした男に恋し、男に自分を愛させようと策略をめぐらすという、少しひねった形でアマゾンの恋を描いた。それぞれのお国柄、時代、作家の個性の違いによって、アマゾンの表わされ方もおのずと違うものになっていることは言うまでもない。そして、アマゾンのエピソードをたどるうちに、アマゾンのある部分には、フェミニズムの問題と関わる部分のあることが見えてきたことにも、ここでふれておかななくてはならない。これについては稿を改めて考えたい。

#### 注

人名表記については、同一人物の表記が書物によってまちまちであるが、ギリシア人はギリシア読みで統一したことを、最初におことわりしておく。

- 1 アポロドーロス、『ギリシア神話』第2巻第5章、高津春繁訳（1953年）、東京、岩波書店、1971年参照。
- 2 『前掲書』摘要1の16。高津春繁氏は、アポロドーロスの特徴の一つとして、ギリシア神話の伝承を真面目に、忠実に伝えている点をあげている。「彼は平然として相反し相矛盾する伝承を語る……これは一方に於いて著者が忠実に原典の筋を伝えていることの間接証明となる……」『前掲書』p. 7参照。
- 3 『前掲書』摘要1の17。

- 4 『前掲書』摘要5の2。
- 5 『前掲書』摘要5の1。
- 6 ホメーロス、呉茂一訳『イーリアス』第3書 189、(上)(1953年)東京、岩波書店、1969年、110ページ。ホメーロスとは、ギリシア最古、最大の叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』の作者に与えられた名。この他にも色々な叙事詩が彼に帰せられているが、アレクサンドレイア文献学者は、上記の二詩以外は、すべて彼の作ではないと断言している。彼の年代に関しても、前1159年ないし前686年の諸説があるけれども、少なくとも前800年以前でなくてはならない。出生地に関しても、すでに古代において数説あり、確実ではないが、小アジアのイオニアとアイオリスの境界付近と考えられる。
- 7 『前掲書』第4書 186、224ページ。
- 8 Pindar, *The Odes of Pindar Including the Principal Fragments*, Fragment 172, trans. Sir John Sandys, Loeb Classical Library, Harvard U. P. and Heinemann, 1978. ピンダロス(前522(-18)~442(-48))はギリシアの合唱隊用抒情詩人。年少にして作詞と音楽を学び、20才で既に名声を馳せ、特に運動競技勝利歌で有名。オリュンピア、ピュティア、イストミア、ネメアの四大祭典の競技における勝利を歌った作品を含む勝利歌がほぼ完全な形で現存する。ギリシア最大の抒情詩人。
- 9 Pindar, "Olympian Odes" VIII 65.
- 10 Pindar, "Olympian Odes" XIII 129.
- 11 Pindar, "Nemean Odes" III 68.
- 12 アISKYロス、『縛られたプロメテウス』『アISKYロス・ソフォクレス』『世界古典文学全集』第8巻、(1964年)、東京、筑摩書房、1981年、p. 18。アISKYロス(前525~456)は、ギリシアの三大悲劇詩人の最初の人。アッティカのエレウシスの神官職の子。作品は90篇以上あるが、本文中にあがった作品の他、『テーバイへ向う7人』『オレスティア』を成す三部作『アガ멤ノン』など7篇が現存する。
- 13 アISKYロス、『救いを求める女たち』『アISKYロス・ソフォクレス』『世界古典文学全集』第8巻、p. 154。



- 14 アイスキュロス、『慈みの女神たち』、『アイスキュロス・ソフォクレス』『世界古典文学全集』第8巻、p. 117。
- 15 『前掲書』、p. 118。
- 16 自由なスキュタイ人とは、王族スキュタイ人のことである。
- 17 ヘロドトス、『歴史』第4巻110～117、『ヘロドトス』『世界古典文学全集』第10巻(1967年)、東京、筑摩書房、1982年、pp. 204～206。ヘロドトス(前484頃～425頃)は、ギリシアの歴史家。著作の現存するギリシア最古の歴史家で「歴史の父」と呼ばれる。小アジアのハリカルナッソスの名家に生まれ、同市の僭主に追放されてサモスに移り、アテーナイにあってペリクレスをめぐる人々と交際し、特にソフォクレスに親しんだ。その著作 *Historiai* (「研究」の意) は、ペルシア・ギリシアの対立抗争を骨組みとし、旅行によって自ら採録した膨大な知識を豊富に折り込み、ペルシア戦争を詳述して前479年に及んでいる。
- 18 Apollonius Rhodius, *The Argonautica*, Book II 368～385, trans., R. C. Seaton, Loeb Classical Library, Harvard U. P., and Heinemann Ltd., 1967. ロドスのアポロニオス(前295年頃)はギリシアの叙事詩人。詩人カリマコスの弟子であったが、のち不和となり、ロドス島に身をひいてロディオスなる名をもった。のち生地アレクサンドレイアに帰り、図書館の管理者となる。主作品はアルゴ船の伝説を題材とした『アルゴ船物語』。新しいロマンティックな感情を古いホメーロスの言語を用いて表現した名文家として、当時彼の右に出る者はなかった。
- 19 *Ibid.*, Book II 944～1000.
- 20 *Ibid.*, Book II 1168～1178.
- 21 Diodorus Siculus, *Diodorus Siculus*, Book II 43～46, Vol I, trans. C. H. Oldfather, Loeb Classical Library, London, William Heinemann Ltd., Cambridge Massachusetts, Harvard U. P., 1967. ディオドロスは前1世紀末、シチリア生まれの歴史家。『図書館』の名で呼ばれる世界史を著した。エジプト、インド、メソポタミアから筆を起し、カエサルのガリア征服に及ぶ40巻の大著であり、古代の史書を多数忠実に再録している点に価値があると言える。

- 22 *Ibid.*, Book IV 16.
- 23 *Ibid.*, Book III 71.
- 24 *Ibid.*, Book III 52~55.
- 25 プリニウス、『プリニウスの博物誌』第6巻第19の7、中野定雄他訳、東京、雄山閣、1096年、p. 250。プリニウス(23(24)~79)は、ローマの著述家。アフリカ、スペインで要職を歴任。最後にミセヌムの提督としてヴェスヴィオ火山の大噴火の視察に赴き、カステラマレの海岸で有毒ガスのため窒息死した。学問、特に博物学に関心が深く、現存する唯一の著作『自然史(博物誌)』は非常に龐大な、しかもよく整頓された理科学書のようなもの。
- 26 『前掲書』第6巻第35の14、p. 250。
- 27 プルタルコス、『テセウス』、『プルタルコス』、『世界古典文学全集』第23巻、東京、筑摩書房、1966年、p. 116。プルタルコス(46頃~120以後)は、末期ギリシアの道学者、歴史家。ギリシア的知識と世界観の最後の代表者。ボイオティアのカイロネイアの富裕な名門に生まれ、アテナイで高等教育を受けた。エジプト、ローマに旅し、ローマの名士や高官と親しかったが、多く故郷の市にとどまり、市政に尽力した。非常に多作で227部の著があったと伝えられる。伝記は晩年の作で、対比列伝、俗に英雄伝と呼ばれ、ギリシアとローマの類似の生涯を送った者を対比して比較研究した23(46人)組の他に、4人の単独伝記が残っている。
- 28 タキトゥス、『年代記』第4巻56、『タキトゥス』、『世界古典文学全集』第22巻、東京、筑摩書房、1965年、p. 130。タキトゥス(55頃~115以後)は、ローマ第一の歴史家。官途につき、アグリコラの娘と結婚し、法務官、総領、アジア州の知事を歴任。雄弁をもって聞こえ、小プリニウスと親交があった。短篇の他、『年代記』『歴史』の二大著がある。あくまで史筆の正確を期した点で、トゥキュデイデスと共に古代史の第一流に属する。
- 29 『前掲書』第3巻61、p. 100。
- 30 Quintus Smyrnaeus, *The Fall of Troy*, I 538~830, trans. Arthur S. Way, Loeb Classical Library, London, William Heine-

man, Cambridge, Massachusetts, Harvard U. P., 1962. スミュルナのクイントゥスは、4世紀ギリシアの叙事詩人。ホメーロスの『イーリアス』の終りの部分、すなわちヘクトールの死から物語を始め、トロイア陥落、ギリシア軍の凱旋を歌っている。文体はホメーロスの模倣。

31 Ariosto, *Orlando Furioso* XIX 57~XX 97, trans. Barbara Reynolds, Penguin, Books 1975. アリオスト (1474 ~ 1533) はイタリアの詩人。エステ家出身の枢機卿イッポリト一世に仕え、将校および外交官として活躍し、後イッポリトの弟フェッラーラ公アルフォンソー一世に仕えた。代表作品は『狂えるオルランド』。

32 Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, Book V iv 21~vii 45, in *The Poetical Works of Edmund Spenser* (1912), London Oxford U. P., 1961. スペンサー (1552? ~ 1599) は、エリザベス朝の桂冠詩人。

#### (参考書)

『岩波西洋人名辞典増補版』、東京、岩波書店、1982年。

高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』、東京、岩波書店、1960年。

#### (付記)

アマゾン関係の文献について愛知大学講師アングス・マッキンドー氏に有益な示唆をいただき、またギリシア語の人名、地名表記について本学教授高田邦彦氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。